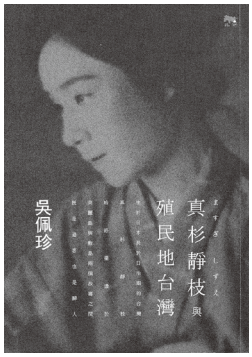
書評

呉佩珍著

『真杉静枝と植民地台湾』

呉佩珍『真杉靜枝與殖民地台灣』聯經出版事業股份有限公司、二〇一三年

垂水千恵



本書は台北にある国立政治大学台湾文学研究所助理教授であり、日本植民地期台湾文学研究の旗手の一人である呉佩珍による本格的な真杉静枝論である。

真杉静枝（一九〇〇～五五）は従来、作品よりも私生活が注目されることの多かった作家である。武者小路実篤、中村地平、中山義秀との恋愛遍歴が人々の好奇心を刺激するためであろうか。火野葦平「淋しきヨーロッパの女王」（一九五五）に始まり、石川達三『花の浮草』（一九六五）、比較的記憶に新しいところでは林真理子『女文士』（一九九五）に至るまで、その生涯がスキャンダルに描かれてきた。一方、一九九〇年後半以降、日本統治期台湾文学の研究の隆盛とともに、台湾経験を描いた日本人作家の一人として、真杉静枝への再評価の兆しが出てきた。一九九八年刊行の『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集　別巻』に短編「南方の墓」が再録されたことに始まり、作品集『小魚の心』（一九三八）、『ひなどり』（一九三九）、『その後の幸福』（一九四〇）、『南方紀行』『ことづけ』（一九四一）などが復刊されている。それと並行して真杉研究も始まり、李文茹、高良留美子が複数の論文を発表しているが、一冊にまとめられた本格的な真杉研究書としては、日本・台湾を通じて本書が最初ではないだろうか。日本文学にも台湾文学にも、またジェンダー研究にも通じた著者の手に拠る、読み応えのある一冊である。

では、まずは本書の構成と内容を簡単にまとめておこう。本書は序章、結章を含む九章および真杉静枝年譜から構成されている。

さらに第一章〜第二章は「第一部「私」小説與「私小説」書写」、第三章〜第五章は「第二部　台湾書写的黄金期：「國策文学」的明與暗」、第六章〜第七章は「第三部　帝國與帝國之間」というふうに分けられている。

序章では十津川光子の評伝に拠りながら、真杉の略歴が紹介された後、前述の石川等によるモデル小説の存在も紹介されている。本書が真杉作品の翻訳がほとんどない台湾での出版であることを考えると、導入としての序章の存在は必須であろう。

続く「第一章　真杉静枝的自伝小説與「台湾」記号的反復」では、まず真杉の代表的な自伝小説「むすめ」（一九四〇）と「或る女の生い立ち」（一九五三）を比較しつつ、真杉の描く自画像と「殖民地台湾」の関係が論じられている。両作品ともに娘の視点から、望まぬ結婚を強いた母親への憎悪が描かれているのだが、呉は真杉の両親が内地を追われるように台湾に移住したことに注目、いわば「敗者」集団である植民地台湾の日本人共同体における強力な閉鎖性の存在を指摘する。そうした閉鎖性は、娘の身体を「純潔」という観念で管理しようとする母の権力として顕現する。そうした母＝「殖民地台湾」からの遁走を複数の男性との恋愛を通じて企てる一方で、「精神原郷」としての台湾＝母を求め続ける真杉のアンビバレンツな姿を読み解く呉の筆致は見事である。

「第二章　殖民史？　羅曼史？：殖民地台湾與武者小路実篤、真杉静枝、中村地平的文学交渉」では、真杉の愛人であった武者小路実篤と中村地平が書いた台湾関係作品と真杉作品の間テクスト性について論じられている。武者小路は一九一五年に台湾で起こった大規模な抗日武装蜂起事件である噍吧哖（タバニー）事件について評論「八百人の死刑」（一九一五）と戯曲「ある商談」（一九一六）を発表したのみならず、敗戦の翌年に創刊された『東北文学』創刊号に、日本の帝国主義路線を反省する評論「新しい出発」を発表している。ところがその同じ『東北文学』に真杉は噍吧哖事件を描いた「花樟物語」を発表している、というのである。複数のメディアに掲載されたままで単行本としてはまとめられていない「花樟物語」を、各掲載誌にまで遡って確認した呉の手堅い研究姿勢が生んだクリーン・ヒットと言えるだろう。

第二部は「第三章　言與不言之間：真杉静枝的「國策文学」的書写與台湾」、「第四章　皇民化時期的語言政策與内台結婚問題：以真杉静枝〈南方的語言〉為中心」、「第五章　台湾皇民化時期官方宣伝的建構與虚実：論真杉静枝「沙韻之鐘」翻案作品」の三章から構成されている。各章のタイトルが示すように、『南方紀行』（一九四一）、『ことづけ』（一九四一）等に所収された戦時期台湾を描いた真杉作品を論じたものである。第三章では従来戦争協力の国策文学であるとされてきたこの時期の各作品の分析を通し、真

杉が「中介者（in-between）」（九〇頁）としての台湾の代言人としての視点から台湾を描いていること。さらに真杉の国策文学は生命への執着と死への恐怖という、国策文学らしからぬエクリチュールを特徴としていることが指摘されている。さらに第四章では台湾語を見事に操り、すっかり台湾南部の町の生活に根付いている李金史の妻阿花が、実は日本人木村花子であった、という内容の「南方の言葉」について論じたものである。呉は主導権を握っている宗主国／男性の言語を被植民者が模倣する、という植民地における言語政治の構図を転覆させた作品として「南方の言葉」を評価している。第五章では、真杉の「リオン・ハヨンの谿」と「サヨンの鐘」物語の幾多のバージョンとの差異について分析、サヨンと出征する教師の関係を単純な師弟関係として位置づける一連の「サヨンの鐘」物語に対して、真杉は師弟間の恋愛感情の要素を加えていること、さらに出征する教師村西を文化学院出身者とすることで、西村伊作を彷彿とさせる記号（icon）を加えていることなどから、真杉作品は支配者側の流布させた「サヨンの鐘」物語の枠に収まらない要素を持った作品であると評価している。

「リオン・ハヨンの谿」は一九四一年十一月刊行の『ことづけ』に収録されており、構想されたのがそれより前であることは確かである。一方、「サヨンの鐘」物語が『理蕃の友』で紹介され始めたのは一九四一年に入ってから、村上元三の戯曲「サヨンの鐘」が『国民演劇』に発表されたのが一九四一年十二月であることを考えると、「リオン・ハヨンの谿」は「サヨンの鐘」物語の翻案というよりも、それに先行する作品と見たほうがいいだろう。そういう意味では、真杉作品に暗示されていた師弟間の恋愛感情が削除されていく過程は、日本的プロパガンダ文学のあり方を考える上で興味深い。しかし、かといって「リオン・ハヨンの谿」を独立した作品として評価できるか、というとそれはまた別問題であろう。例えば筆者は呉の言う師弟間の恋愛感情は語り手「私」（岸田麗子を思わせる）の村西への思いの反映に過ぎないのではないかと読むが、そうした余計な「私」の物語が大半を占める構成の逸脱性を積極的に評価できるかどうかは疑問である。そうした作品自体に対する否定的な印象は「南方の言葉」にも共通する。真杉の描く阿花に呉の言うような言語政治の構図を転覆させるにふさわしい力があるとは正直思えない。呉の指摘するように真杉は「中介者」としての台湾の代言人としての視点から台湾を描いていると言えないわけではない。しかし、日本と中国の「中介者」にならざるを得なかった台湾の相剋を描き続けた楊逵、呂赫若、張文環、龍瑛宗等の台湾人作家の作品を読み続けてきた筆者にとって、真杉の戦時期台湾を扱ったテクストはあまりに薄い。第二部における呉論文の指摘は興味深く示唆に富むところが多いが、第一部ほど諸手を挙げては賛同できないのは、テクスト自体に対す

る疑問が筆者にはあるからである。今後真杉作品を再読する中で、また違った印象を持つようになるかもしれないが、現時点での正直な感想を述べておく。

さて、「第三部　帝國與帝國之間」は戦後の真杉作品を論じた二章から構成されている。

「第六章　鄉關何處？：真杉静枝「花樟物語」的台湾再現與変化」は入手しにくい「花樟物語」の発掘から始まり、敗戦を経て、真杉をはじめとする作家たちが台湾をどう再表象していくか、という問題に取り組んだ労作だと言える。さらに、「第七章　日本帝國崩壊與美國霸権君臨」は『思はれ人』（一九四六）を対象に引き揚げの問題を論じたもので、『思はれ人』が林芙美子の『浮雲』（一九四九）に先行するテクストである、という指摘は興味深く読んだ。真杉と林はほぼ同世代に属する上、従軍作家としての経験も共有している。こうした従軍作家たちが戦後をどう描いたかは非常に興味深いテーマであり、是非研究を発展させて欲しい。また、真杉編集の雑誌『鏡』にアーネスト・ホーブライトの小説「圭子さん」を掲載したり、真杉自身も「アメリカの十字架」（『新潮』、一九五四）を執筆したりするなど、もう一つの「帝国」であるアメリカへ接近していく真杉の軌跡も興味深く読んだ。

ちょうどこの頃、ダブリンで開催された第二十五回ペン大会（一九五三年六月）に真杉は日本代表として参加している。その時の真杉の「奇妙な」行状を描いたのが火野葦平の「淋しきヨーロッパの女王」であり、火野は「英語が上手でも流暢でもない」のに、「もの怖ぢせず誰とでも進んで語る勇敢さ」で英米の人々とコミュニケーションを取り合い、キモノ姿で踊る真杉像を記録している。火野の筆致による真杉像は、限りなくパンパンに近いのだが、問題は真杉自身というよりも征服者に思い通りにされる同胞女性を屈辱的な気持で見つめる火野の視線である。火野と真杉が最初に出会ったのは戦中の「台湾講演旅行」であり、一連の従軍小説で一世を風靡した火野はその時真杉に助言を与えたと言う。真杉も『ことづけ』所収の「広東春日記」において、全盛期の火野の姿を記録している。[1] まさに呉の言う「日本帝国の崩壊とアメリカ覇権の君臨」という問題は、真杉だけではなく多くの日本文学者における戦前／戦後を考える上で重要である。

以上のような様々な示唆に富む力作として、本書が翻訳され日本人研究者にも共有されることを強く望みたい。

注

（1）詳細は、垂水千恵「台湾という身体の「再現」――真杉静枝を書くということ」張季琳編『日本文学における台湾』台湾：中央研究院人文社会科学研究中心、二〇一四年、四一～六二頁参照のこと。